

日 本 鉄 鋼 協 会 役 員

会 長



森 田 善一郎
大阪大学工学部材料開発工学科教授

副 会 長



増 子 昇
東京大学生産技術研究所教授



永 井 親 久
(株)神戸製鋼所代表取締役副社長

理 事



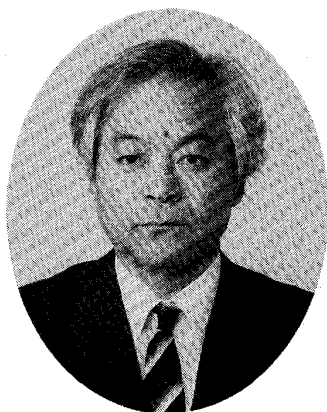
島 田 仁
専務理事



池 高 聖
(庶務担当)
東洋鋼鈑(株)専務取締役



牛 山 博 美
(企画・育成担当)
大同特殊鋼(株)専務取締役



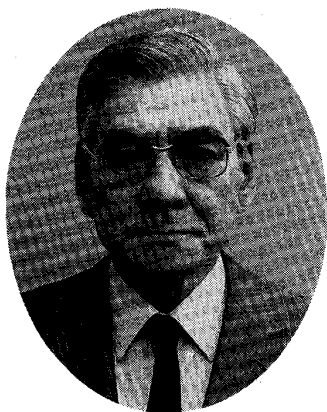
小 口 醇
(編集・研究担当)
金属材料技術研究所科学研究官



小 野 陽 一
(編集担当)
九州大学工学部材料工学科教授



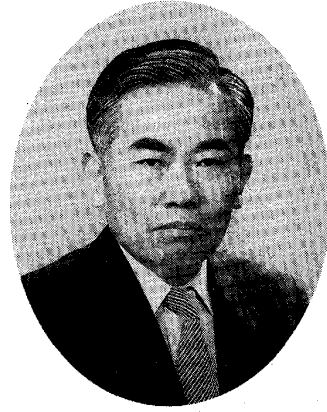
及 川 洪
(編集担当)
東北大学工学部材料物性学科教授



川 口 三 郎
(会計担当)
(株)日本製鋼所顧問



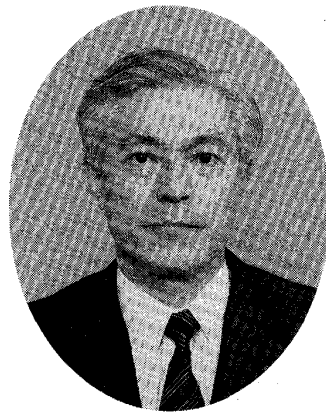
川 上 正 博
(庶務担当)
豊橋技術科学大学工学部教授



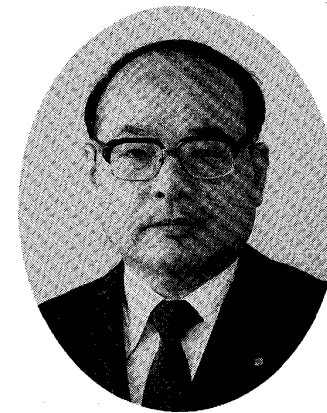
川 田 敏 郎
(企画担当)
(株)中山製鋼所取締役



菊 池 実
(編集担当)
東京工業大学工学部
金属工学科教授



木 村 達 也
(国際・研究担当)
新日本製鐵(株)取締役
光製鉄所長



北 村 卓 夫
(企画・研究担当)
新日本製鐵(株)常務取締役



倉 重 輝 明
(企画・編集担当)
住友金属工業(株)常務取締役
研究開発本部長



佐 野 信 雄
(編集・企画担当)
東京大学工学部
金属工学科教授



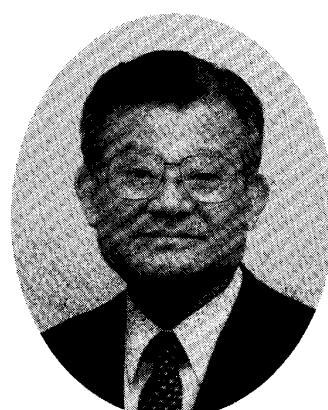
佐 野 正 道
(企画・編集担当)
名古屋大学工学部
材料プロセス工学科教授



坂 倉 昭
(研究・企画担当)
日新製鋼(株)常務取締役
新材料研究所長



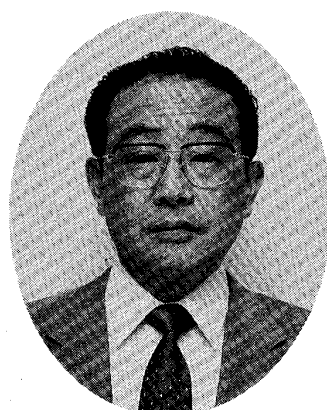
瀬 戸 浩 蔵
(企画担当)
山陽特殊製鋼(株)専務取締役



高 石 昭 吾
(庶務担当)
(社)日本鉄鋼連盟技術管理部長



田 口 喜代美
(会計担当)
トーア・スチール(株)取締役
技術サービス部長



谷 野 満
(企画担当)
東北大学金属材料研究所教授



中 江 秀 雄
(編集担当)
早稲田大学理工学部材料工学科教授



中 島 一 郎
(企画担当)
通商産業省基礎産業局
製鉄課長



三 好 俊 吉
(庶務担当)
日本鋼管(株)代表取締役副社長



山 口 正 治
(研究担当)
京都大学工学部金属加工学科教授



山 田 孝 雄
(会計担当)
川崎製鉄(株)専務取締役



横 川 敏 雄
(研究担当)
北海道大学理学部化学科教授



横 田 孝 三
(企画担当)
日本冶金工業(株)専務取締役

監 事



西 崎 允
(株)神戸製鋼所常務取締役



雀 部 実
千葉工業大学工学部金属工学科教授

新 名 誉 会 員



川崎製鉄株式会社 代表取締役会長
八 木 靖 浩 殿

氏は、昭和 18 年 9 月、東京帝国大学工学部冶金学科卒業後、同 10 月川崎製鉄(株)の前身である川崎重工業(株)に入社した。昭和 25 年川崎製鉄(株)として分離独立後、同社千葉製鉄所・製鋼部副部長、水島製鉄所・製鋼部長、管理部長を経て、昭和 46 年同社取締役・水島製鉄所副所長に就任した。その後、常務取締役、専務取締役、副社長と栄進し、この間、ツバロン・プロジェクト協力本部長、技術本部長、エンジニアリング事業部長を歴任した。その後、昭和 57 年 6 月取締役社長、平成 2 年 6 月代表取締役会長に就任し、現在に至っている。

氏は、川崎製鉄(株)入社以来 30 年余の製鋼技術部門と製鉄所建設に従事する間、旺盛な研究心とチャレンジ精神をもって、製鋼技術の確立に寄与し、世界有数の製鉄所を内外に建設した。これにより鉄鋼業の発展に多大なる貢献をなし、その業績は世界的に高い評価を得ている。製鋼技術分野においては、酸素の大量吹込み技術の確立により大型平炉の生産性の増大に寄与し、また転炉製鋼法に関しては多孔ノズルの開発により生産性の向上と鋼質の向上を達成するなど大型転炉製鋼技術を大いに発展させた。また、水島製鉄所の建設にあたっては、転炉・連続 casting システムによる製鋼製造技術確立のほか、製造技術の標準化につとめコンピューターによるオンラインシステムの導入による近代的製鉄所管理システムを確立した。

氏は、経営者としての業績も顕著で、昭和 57 年 6 月、

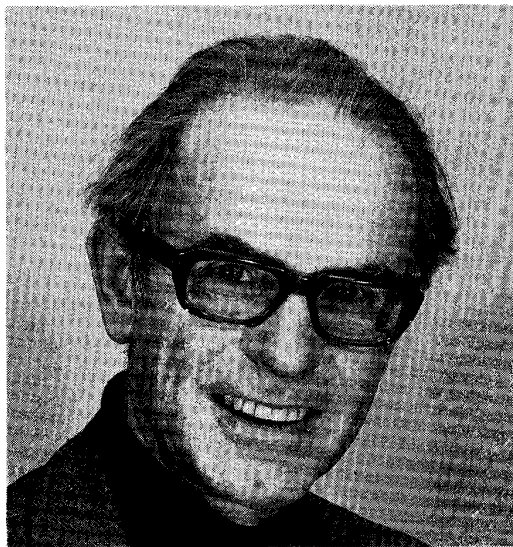
取締役社長就任間もなく迎えた円高不況に始まる鉄鋼経営の危機にあたり、社員の活力を結集するとともに果敢な決断により鉄鋼事業の体質改善を進め、あわせて、エンジニアリング事業や LSI 事業などの新事業を推進して、同社の再生をはかり将来への経営基盤を確立した。

氏は、また、豊かな国際感覚と見識を持ち、国際的な友好関係の促進とともに海外の技術水準の向上と産業育成に尽力し、日本鉄鋼業の声価を高めた。特に、ブラジル国ツバロン製鉄所の建設にあたっては終始その指揮をとり、同国の産業発展に寄与したとして同国からは「南十字星国家大勲章」を授与された。このほかフランス国家功労賞「オフィッシュ賞」を受賞するなど、海外への技術協力に対する評価も高い。

氏の活躍は鉄鋼業界、産業界から学会などの全般にわたっている。本会においては、理事・副会長(昭和 54 年～56 年 4 月)、会長(平成元年～平成 2 年)をつとめ、鉄鋼業界においては、日本鉄鋼連盟副会長、同技術政策委員長、国際鉄鋼協会理事などを歴任し、鉄鋼業界の指導者として業績を残している。その間、産業界でも活躍しており、現在は経済同友会幹事、関西経済連合会理事、日本経済団体連合会常任理事・輸送委員会委員長の要職にある。

かかる業績により本会にあっては渡辺義介賞(昭和 62 年)、製鉄功労賞(平成 2 年)を受賞したほか、国家からは藍綬褒章(昭和 57 年)を授与された。

新 名 誉 会 員



スウェーデン王立工科大学名誉教授

Sven G. Eketorp 殿

氏は、1916年スウェーデンに生まれ、1942年ストックホルムの同国王立工科大学冶金学科を卒業した。翌年Hoganas社に入社、海綿鉄の製造に携わり、1949年カナダのOntario Research Foundationに転じ、直接還元の研究に従事した。1951年フランスのIRSIDにおいて還元工程の調査の後、スウェーデンStora社Domnarvet研究所に入所、Bo Kalling教授に付き、次いで製錬研究部長として多くの業績を残した。

1960年、請われてストックホルム王立工科大学の冶金学教授に就任したが、氏はそれ以降1981年まで21年間、学科教授、さらに部主任教授の地位にあり、スウェーデン鉄冶金学の中心であった。

鉄冶金の学究として氏は、常に将来あるべき理想的な製錬法を追求した。既に1960年代の初頭、当時斬新な概念であった熔融還元法の原理を講義し利点を説いたが、現在に至る迄世界の鉄鋼学会に公表した180点の論文のうち、製錬法の発展、未来の鉄鋼プラント、エネルギー問題への考察、熔融還元、革新的な新プロセスとその概念等、将来の鉄鋼製錬を展望し、あるいは後身の教導となるものが主体を占めている。

自らの祖国スウェーデンと我が国の鉄鋼学会及び業界の発展的交流に対する氏の長年にわたる貢献は、よく知られたところである。氏は、60年代に高度成長期を迎

えた日本鉄鋼業の将来性に着目、1962年から76年迄毎年一人ずつ、我が国鉄鋼業の製鉄・製鋼技術者を延15名、王立工科大学へ留学させ、同国実業家E. Vallak氏拠出の奨学金によって、修学を支援した。この留学制度を契機として、両国の鉄鋼業界は交流を深めるようになった。氏自身も招待を受けて来日、学会・業界に多くの知己を得、それを発展させて3回に亘る日本-スウェーデンシンポジウム(1971, 78, 81)を開催した。氏はまた我が国との共同研究の推進に努め、1972年から88年にかけて当時少壮の学者、企業研究者合計6名を王立工科大学へ招聘した。また、1974年11月の本会秋季講演大会においては、「A Proposal for a Future Steel Plant and Research Program」の演題のもとに特別講演を行った。

合せて26年に及ぶ年月の間、親しく氏の指導を受け、あるいはその下で研究する機会を得たこれらの製錬、製鋼関係の技術者は、今学会、業界でそれぞれ中枢の地位を占め、我が国鉄鋼業の発展に大きく寄与している。

1978年から82年迄、氏はスウェーデンの国家技術開発委員会のプロジェクト「Future Steel Works」の主査を委嘱された。現在、王立工科大学の名誉教授であり、フランス鉄鋼協会からも名誉会員に推挙されている。